

<p>6月21日 (日)</p> <p>エルテル記 5章</p>	<p>「彼(ハマン)は、自分のすばらしい財産と大勢の息子について、また王から賜った榮譽…自分の栄進についても余すことなく語り聞かせた」(11節)。この二日後に彼を待ち受けている運命を知らずに有頂天になるハマン。権力を追求し神を畏れることを忘れた人間の愚かさが示されていく。今日、各人に注がれている神の慈しみを心から感謝し礼拝をささげよう。</p>
<p>22日 (月)</p> <p>エステル記 6章</p>	<p>「その夜、王は眠れないので、宮廷日誌を持って来させ、読み上げさせた」(1節)。この時まで、モルデカイの功績が無視されていたとは、何といい加減なシステムなのだろう。しかし、まさにこのタイミングで王がモルデカイの働きに目をとめ、ハマン失脚のきっかけとなるとは。私たちにはつながりが見えない「点と点」を、神はつなげて、用いていかれる。</p>
<p>23日 (火)</p> <p>エステル記 7章</p>	<p>「この言葉が…発せられるやいなや、人々はハマンの顔に覆いをかぶせた」(8節)。絶対王政の恐ろしさ。絶対権力を手にした人のひと言で、人の尊い命が処罰されていく。決して神になりえない人間が、神のように振舞うことはゆるされないはず。神の前に一人一人が相対化されて、神の愛によってつなぎ直されていく、主イエスが生きられた足跡を心に刻みたい</p>
<p>24日 (水)</p> <p>エステル記 8章</p>	<p>「王の命令とその定めが届くと、州という州、町という町で、ユダヤ人は喜び祝い、宴会を開いて楽しくその日を過ごした」(17節)。モルデカイとエステルの信仰と勇氣により民族虐殺の危機を免れたユダヤ人は、神が主導された奇跡を心から喜んだ。しかし彼らの隣で復讐の恐怖におびえる他民族の人々がいた。彼らが恐怖する姿に私たちは何を聴くのか。</p>

<p>25日 (木)</p> <p>エステル記 9章</p>	<p>「ユダヤ人に立ち向かう者は一人もいなかった。どの民族もユダヤ人に対する恐れに見舞われたからである」(2節)。ユダヤ人虐殺計画は取り消され、逆にユダヤ人に危害を加える者たちへの復讐が公認されていく。このとき人々の心を支配した「恐れ」は結局、次の新たな復讐につながる。主は十字架でこの憎しみと恐れ of 連鎖を断ち切られたのではないか。</p>
<p>26日 (金)</p> <p>エステル記 10章</p>	<p>「モルデカイは…ユダヤ人には仰がれ、多くの兄弟たちには愛されて、彼はその民の幸福を追い求め、そのすべての子孫に平和を約束した」(3節)。政治的権力を託された者の使命は人々の幸福を追い求め平和に導くことだが、絶大な権力はその使命を忘れさせる誘惑に満ちている。主なる神の前に傲慢を砕かれずして人は正しく権力を用いることはできない。</p>
<p>27日 (土)</p> <p>ヨブ記 1章</p>	<p>「ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいません」(11節)。「無垢な正しい人ヨブ」に襲いかかった不条理な苦難。神はなぜそのような不条理をゆるされたのか。ヨブが経験したような不条理が満ちているこの世界で私たちはどう生きるのか。ヨブの暗闇の中にキリストにつながる救いを見つけない。</p>
<p>28日 (日)</p> <p>ヨブ記 2章</p>	<p>「彼ら(ヨブと親しいテマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファル)は七日七晩、ヨブと共に地面に座っていたが、その激しい苦痛を見ると、話しかけることもできなかった」(13節)。ヨブの苦しみ友人たちは寄り添おうとしたが、その苦しみに伴いぬくことはできなかった。イエス・キリストが私たちの苦しみに伴ってくださっていることを覚えて。</p>